科學的人生觀を訊く

醫學博士
理學博士
額田晉氏に

特
157
3
4

始

特263
157

醫學博士
理學博士
額田晉氏に

科學的人生觀を訊く

昭和一〇・六・五
帝國圖書館

序

本文は科學に立脚した人生觀に就て、雜誌**現代**の記者が額田博士に訊したる應答の要旨で、現代（昭和九年二月號）に掲載されたものを、多少增補したものであります。

自然科學の驚くべき發達から、既成宗教を離れ行く、頼りなき近代人の群に呼びかける額田博士の切切の言、犀利詳細を極めたる蘊蓄、無軌道の青年男女をして心を安んじて頼らしむる新興宗教とは、即ち此科學的人生觀であります。

編者しるす

—目　次—

森鷗外先生の死……一
科學と宗教は相反するか……五
科學の立場から……八
自然と法則……一〇
偉大なる無形の力……一五
科學的に見た生と死……一七
正しき人間觀……二一
美化された人間の本能……二六
自然の動向と人類の使命……二八
生死を超えて……三二
心の修養と社會的知識……三四
より良き社會の建設へ……四〇

額田晉氏に科學的人生觀を訊く

醫學博士
理學博士　額田晉氏　　一記者

問　先生が最近新しく科學的な宗教觀とか人生觀とかを提唱され、廣く世の中にお弘めになつて居るといふやうなことを聞きまして、それらについて先生から是非いろ〳〵伺ひたい。斯ういふお願で上つた譯です。

先づ、先生は醫師として、人間の『死』といふ最も深刻な場面に度々遭遇されませう。さういふ患者の『死』に直面した場合の先生の御氣持はどんなですか？

森鷗外先生の死

答　多くの病人を看て居りますと、癒る病人も無論澤山あるが、どうしても癒らぬといふやうなこともある。さういふ時には大抵の者は慌ててしまつて可哀相なのです。どうしても癒らぬ、死ぬといふことが分つて居るのに、非常に慌てて現實社會への執着が

ひどくて見るにしのびない。

どうしても癒らぬといふことが分つて居るならば、それこそ從容として眠るやうにさせたい。癒る病人ならば手を盡して癒さねばなりませんが、どうしても助からぬ病人ならば、安んじて死につくやうにさせたいのです。癒すばかりが名醫ではない、どんな人でも結局は死ぬのですから、その時見苦しくないだけの死に方をさせなければならん。助からぬ病人に安んじて大往生を遂げさせ得る人であつてこそ本當の名醫であると思ふ。

今まで私が看て一番感銘したのは、森鷗外(林太郎)先生です。先生は一生の中で醫者にかかつた事が一度もないと云はれて居りました。亡くなられる一ヶ月程前に私が伺つた所が、自分の死を既に知つて居られ、『家の者が騒ぐから診て貰ふのだが、君の手で最後まで看て呉れ、助手を使つてはいかぬぞ』と云はれました。それから後も先生は病臥のまま傍で筆記を取らせ、著書の完成に努力せられました。ずつと容態が悪化してからも「暑いのに御苦勞さま」とか「そろそろ險惡になつて來た」などゝ云つて平然として居られました。

私は鷗外先生の死を觀て、死を視ること歸するが如しと云ふのは是である、人間は死に直面しては斯うなければならぬと泌々と考へさせられ、深い感銘をうけました。

問　普通の人はさうは行きませんか？

答　普通の病人は、まだ吾々が癒ると思つても、血を吐くとか、何か少し惡いと言はれると、もう死にはしないかと慌ててしまつて餘計惡くなる場合があります。人事を盡しても及ばず、どうしても愈々死ぬといふ間際になつたら、是はもう天命であるから已むを得ないと諦めて、悠々と死につかせたいと思ふのです。死に直面してもがく有樣はとても可哀相で觀て居られません。是は普段から人生觀殊に生命觀といふものがしつかりして居ないからで、『死』といふやうなことを靜かに考へたことがないからです。かういふ點からしても是非ともすべての人は『生命』といふことに關して平素からしつかりした考を持つて居る必要があるのです。

かう云ふ話があります——

一人の旅人があつて、旅へ出て野路を歩んで居つた。すると後から猛獸が追掛けて來るのに氣が付いて一生懸命に逃げた。ふと見ると傍らに古い井戸があつて、その中に草

の蔓が下つて居る。旅人はその蔓を傳つて井戸の途中まで下りた。もう大丈夫だと思つてホッとして下を見たら、そこには大きな毒蛇が口を開けて今にも落ちて來たら一呑みにしてやると待構へて居る。更に上の方を見たら自分の命を托して居る蔓の根を白と黑との二疋の小さな鼠が代る代る嚙つて居る。旅人は恐ろしくてたまらない。ふと前の方を見たら如何にも美しいおいしさうな果物が澤山に自分の眼の前に實つて居る。そこで飢えてゐた旅人はつひ恐ろしさを忘れて、その果物を一生懸命にむさぼり食べたと云ふのです。

旅は人生、猛獸は過去、毒蛇は未來、白と黑との二疋の鼠は晝と夜、美しいおいしい果物を食べて居るといふのは、自分の運命を忘れて眼前の浮薄な物質的の欲望に心を囚はれて居る有樣。――是は話ではなくてよく考へて見れば總ての人がさういふ狀態にあるのです。老若男女を問はずすべての人は、考へ方によれば日一日と死に近づいて居るのですが、多くの者はそれを忘れて只眼前の物質的欲望を滿足さす事にのみ心を奪はれて居るのです。それでは死に直面してあわてる筈です。だからすべての人は普段から生死の問題をよく考へて、生命觀といふものを持つて居なければならぬのです。そして生

死といふものを超越し、生命をば非常に大切にするが、一面に於ては死を恐れないといふ安住の境地に達して居なければならないといふことを私は考へて居る譯です。

問 今の若い人達は宗教心がない譯ではないが、今までの宗教には賴らうといふ氣持にならないのではないでせうか。

科學と宗教は相反するか

答 宗教心のない者はありますまい。ただ十五六世紀の所謂文藝復興期の頃から漸次に自然科學といふものが非常に旺んになつて來て、その結果、既成宗教に賴る氣持がだんだんと薄くなつて來たのです。宗教は元より心の問題であり、自然科學は自然界の物的現象、即ち物質を對象として研究するのであるから、宗教と科學とは全然反對の立場にあるやうに皆が考へた爲です。しかし本當に自然科學をしつかり研究すれば、それは決して宗教と相背馳するものではない。科學の進歩は終局に於て宗教的なものに一致するのです。ただ、しかし今日科學の方はどんどん發達して、無線電信も出來れば、ラヂオも出來る、飛行機も飛ぶと云ふやうに、盛んにデモンストレーションをやつてゐるの

で科學の力といふものは誰にでも直ぐ解る。

所が今日の宗教といふものは、二千年も前のままを蒸し返してゐるので、科學的の頭のある現代人にはぴつたりと來ない、詰り今日の人は科學の力は認めるが、宗教と云ふものを無用のものとして振り向かうとしないやうになつてゐる。その結果はどうかといふと、物質的の方面に幻惑されて、人生といふものはどういふものか、人間はどういふ所に心を置いて一生を進んで行けばよいかといふことが解らなくなる。

では人々は果して物質のみに生きる事が出來るであらうかと云ふに、事實は決してさうでない。世の中に出て事業に成功し巨萬の富を得たとしても、夫れのみでは未だ眞の心の滿足が得られないのが實際の狀況でありますし、また昨日までは物質に惠まれて居た者が今日は悲慘のどん底に陷るといふ例も決して尠なくありません。尙此世の中に於ては近親の死、友人の死などに遇はない者は殆んど無いのでありますが、斯る際に果して何が眞に自分の心を慰め力づけてくれるでありませうか。人々は心の中に何物かを求めながらその何物であるかを知らない有樣であるのです。

我國に於ても昔は寺小屋で教育が行はれたから、そこには自ら宗教的背景があり、習

ふ學問それ自身が心の修養になつて居たのでありますが、今日の學校教育に於ては修身はあつても何となく力がなく、化學や物理學や、法律や經濟學等々は人間に理屈や智慧を與へるけれども、それ自體人間の歩むべき道を教へてくれない。それが大きな缺陷で從つて現代の人は人生の意義に關する信念がないから、理屈や智慧を持ち合せて居てもそれを如何に使用してよいかわからずに皆んなが迷つて居る。

今人生を以て大海を航海する船に喩へるならば、現代人の生活は恰も舵なくして大海を航海する船の如きものであります。云ひ換へると、理智に富んで居て、而も信念に缺乏して居るのが現代人の姿であり、道德や藝術やを意識の中に持ちながら心の據り所を失つて居るのが今日の所謂知識階級であるといふことを私は感じて居るのです。

今までは自然科學の發達の經路にあつたのでありますからそれも已むを得なかつたでありませうが、もう今日では科學といふものは相當に發達して居るのですから、吾々は科學の立場から『人間といふものは斯ういふものだから斯ういふ所に心を置いて一生を過せばよいのだ』といふことを考へ直して見る必要がある。それが今日の科學者の最大の任務であると私は思ふ。

問　先生は既成宗教をどういふ風にお考へになつて居られますか。

科學の立場から

答　既成宗教の今の說き方では、その言つて居る內容はよいにしても、一般の人々に科學的の頭が出來て居るから何となくぴつたりと頭の中に這入りにくいやうに思はれます。今日では寧ろそれを科學的に說いた方がよいと思ひます。卽ち神や佛とは云はないで、其の代りに自然界に於ける法則の存在を說いたならばよいのです。私の人生觀は自然觀と、生命觀と、そして人間觀とから成り立つて居りますが、其中で自然觀は少しわかりにくいかと思ひますが、順序として自然觀から述べて見ませう。

凡そ自然界に於て吾々が認識する所のものは、星と月と太陽と地球とであります。そして地球を構成するものは大別しますと土と水と空氣と生物です。それ故に自然界は物質から成り立つて居るとも云へるのですが、然し其の中には無形の偉大なる力が潛在して居るのです。自然界に於けるあらゆる物質は生物でも無生物でも總てが法則に依つて支配されながら存在して居る。また自然界の現象は色々と變化して止まないが、それは

總て法則に依つて支配されつゝただ外觀が變化をして居るのです。どんなものでも法則に依つて支配されないものはない。法則そのものは物ではない、法則は無形の偉大なる力である。それは神秘なる絕對的の存在である。それで盡して居るのです。

詰り宇宙間のどんな小さなものでも、またそこにどんな變化が行はれたとしても、いつでも無形の偉大なる力が宿つて居るといふことを、しつかり摑まへればそれでよいのです。それを法則といへば、科學を修めた人の頭にぴつたりと來る。自然科學の目的は眞理の探究にあると云はれて居りますが、法則は眞理の現はれであり、自然科學の研究はその法則を見出さうと努めて居るのです。物理學や、化學や、或は生物學などは何れも自然科學に屬するのですが、試驗管內に起る反應や、顯微鏡の下に展開せられる美麗なる像は何れも自然界に於ける法則の存在を吾々に物語つて居るのだと云ひ得るでせう。自然科學といふのは、事實を記載する學問であるといふけれども、記載するのは研究の第一步で、その所にどういふ法則が存在するかといふことを見出さうと努めてゐる譯です。要するに、自然界には大きな法則が潛在して居り、その部分々々を見出すことをやつて居るのが自然科學であるのです。

問　詰り自然科學が發達して行けば行く程宗教的な偉大なる力を發見することが出來るといふのですね。

自然と法則

答　さうです。自然科學が發達すればする程自然界に於ける無形の偉大なる力の存在を確認する事が出來るわけです。

昔の偉大なる人格は、釋迦でもキリストでもその無形の偉大なる力の存在を直觀して佛とか神とか言つたのだと私は想像する。その頃は科學がなかつたから、直觀によつて佛とか神とか云つた。その靈感といふものは實に驚嘆すべきでありますが、今では科學といふものが發達して居るから、其の力によつて自然界に於ける法則の存在、即ち無形の偉大なる力の存在を確認する事が出來るのです。

先づ天體の運行に就て考へて見ても、其處に偉大なる法則が存在して居る事は是は誰が考へても慥かであります。あんな無數の星にしても一定の法則に從つて秩序整然とそれぞれの方向に動いて居り、吾等の住む地球も月や太陽と同樣に一つの星に外ならない

のですが、その地球は一つの惑星として自轉しながら一年三百六十五日——違ふ事なく恒星たる太陽の周りを廻り、月は更に一つの衞星として自轉しつゝ三十日で地球の周りを廻つて居る。それはニュートンによれば、萬有引力の法則に支配されながら動いてゐるのです。地球上の色々なものにしてもすべて同樣な法則に依つて支配されて居りますが、特に之を重力の法則と呼んで居ります。生物でも無生物でもそれは皆同じです。斯やうに自然界に於ける萬物は悉く偉大なる法則に支配されながら存在して居るのです。

次に物質が如何にして成立したか、即ち物の成立を元に遡つて考へて見ると其處にも神秘なる無形の偉大なる力の存在を否定する事は出來ない。即ち地上に於て吾々の目に映じ、手に觸れる所のものは、一見千姿萬態でありますが、すべての物質はそれを根源的に觀察するならば、水素、酸素、鐵、鉛等々の如き僅かに九十二種の元素と其の化合物に過ぎないのです。元素又は化合物の性狀を備へた最小の單位が分子で、分子は更にそれよりも小さい原子より成る。なほ近年ラヂウムなる元素が發見されて以來放射線の研究が行はれその結果原子の構造も亦明かになつた。即ち原子は眞中に微粒子なる陽電性の核があつて、その周りを陰電氣を帶びた電子が非常な速さで廻つて居る。丁度太陽

の周りを地球が廻つてゐるやうに。それが原子の構造です。

尙電子は何れの原子にも共通であると一般に考へられて居ります。それですから、つまり電子といふ非常に小さなものがあつて、其集り方の如何に依つて此世の中に色々な物が出來て居るわけです。斯やうな物質成立の法則を考へればそこに神祕なる偉大の力が宿つてゐるといふことは、誰にでもわかる筈です。それは科學的に冷靜に考へれば雖一人疑ひ得ないのです。

それから吾等の住む所には春來り、夏過ぎ、秋去りて冬となり、地上に於ける物的現象は絶えず流轉し變遷して止まぬのですが、その色々の現象や變化、それも皆偉大なる法則に支配されつつ行はれて居るのです。物質不滅の法則と云ふのがありますが、それは地上のあらゆる現象に際し物質は毫も生成又は消滅しないと云ふのです。譬へて見ますと、庭の樹木が大きくなつたとしてもそれは葉と根から炭酸や、水や、色々の無機鹽類、即ち硝酸鹽、燐酸鹽、硫酸鹽、アンモニア鹽などのやうな養分を吸收してそれを自分の體に同化した爲です。決して新たに物質が發生したのではありません。また木材が燃燒して少し許りの灰分のみを殘したとすれば、夫は物質が酸化分解して炭酸瓦斯な

どの瓦斯體と灰分とに變化したので、何れの場合にも本質的には毫も物質が生成又は消滅したのではない。地上に於ける物的現象は、絶えず變化を示して止まないが、それは單に外觀上のことで、之を根源的に考察すると、すべての現象に際し、物質は常に不生不滅であるのです。

それからエネルギー不滅の法則と云ふのがあります。例へば人間は體溫を保ち、運動し、また思考する。それにはエネルギーが必要である。それは何處から攝つて居るかと云ふと食物から攝つて居る。食物の「カロリー」と云ふのは其エネルギーの量なのです。吾々の食物は何かといふと、それには米、麥、豆、芋のやうな植物性のものと、魚肉、獸肉、鳥肉、卵のやうな動物性のものとあるが、動物は植物を食つて生存して居るのであるから、つまり吾々は直接又は間接に植物からエネルギーを得てゐるのです。そして植物は葉と根から吸收した養分を合成する際、例へば葉綠體の作用によつて炭酸と水とから澱粉を合成する際に、太陽のエネルギーをとつて化學的エネルギーとして貯藏して居るのであるから、結局吾々が體溫を保ち、運動し、また思考したりして居るのは、太陽のエネルギーに依つてやつて居るのです。

それから蒸氣機關を例に取ると、是は石炭のエネルギーが一部は熱のエネルギーとなり、一部分仕事のエネルギーに變つて居るのである。それでは石炭のエネルギーは何處から來たかと云ふに、石炭は太古の植物であるから、やはり其含蓄するエネルギーの源泉は太陽から得たのです。夫れ故に太陽のエネルギーに依つて蒸氣機關が動いて居る譯です。また電車が走つて居るとすれば、それは電氣のエネルギーが仕事のエネルギーに變つて居るのである。電氣が水力で起されたとするならば水の持つて居た位置のエネルギーが電氣のエネルギーに變つたので、その水は雲から來り、雲は太陽の熱を受けて地上から蒸發した水であるから、此場合にも結局太陽のエネルギーに依つて電車が動いて居るわけです。

斯くの如く地上に於ける諸般の活動は、殆んど悉く太陽のエネルギーによつて行はれつゝあるのです。そしてエネルギーには化學的エネルギー、電氣的エネルギー、仕事のエネルギー、熱のエネルギーなどあつて、種々な形に變換し得るものですが、其全體の量は增しもしなければ減りもしない。是は所謂エネルギー不滅の法則で、中學校の教科書にも書いてある。さういふやうに外觀上色々な變化をしたやうに見えても、物質は常

に不生不滅であるしエネルギーも亦不滅であるのです。

偉大なる無形の力

斯やうなわけであるから、自然界は物から成つて居るのではあるが、自然界のあらゆる物質は無生物でも生物でもすべて法則によつて成立し、皆法則に支配されながら存在して居るのである。また地上の色々の變化や現象といふものは法則に依つて支配されなから起つて居るといふことは確かである。その法則そのものはものではない、是は偉大なる無形の力である。自然界に於ける法則は未だほんの一部分しかわかつて居ないので、わかつて居ないから吾々は科學といふ一つの方法に依つて此偉大なる無形の力を部分的に見出さうと努めて居る譯です。要するに自然科學は自然界に於ける法則を見出し、一面に於てそれを應用することをやつて居るのです。

これまでは神とか佛とか云つて居たが、そんな言葉は使はないでも法則で充分だ。自然界に於けるあらゆる物質、それは生物であつても無生物であつても、すべて無形の偉大なる力に依つて出來、それによつて支配されて居るといふことをしつかりと心の中に

摑めばそれでよいのです。現代人のもつべき人生觀の根本はそれである。尠くともそれは私の自然觀であり、私の人生觀の根本はそれであるのです。よく人は神とか佛とか、さういふものがあるかないかなど議論をする者があるやうですが、法則の存在は誰一人疑ふ者がない筈である。中學校の本にも小學校の本にも書いてある。今日法則の存在といふことを言つて頭に這入らん人はないであらう。その法則は言ひ換へれば無形の偉大なる力・神祕なる絶對的の存在で、それは實に眞理の現はれであるのです。學校で敎へる物理學や化學はさう云ふ意味から云ふと、人生觀の根本概念ともなるのです。

化學や物理學や生物學ならば現代人は納得するが、私はそれで澤山であると思ふ。自分自身も亦自然の一部分であること、そして自然界には無形の偉大なる力が潜在し、自分も亦其力によつて生じ、其力に支配されつゝ存在して居る事を心の中にしつかりと摑み、其處に心を置けば自ら心の據り所が出來て來る。己が心を自然界に潜在せる無形の偉大なる力に通はせて居れば、自ら人生の悦びと力とが生れ出づるのであります。

よく文章を書く人が『心はよく自ら天地に通じ山河を動かす』などと言つて居るが、自分と言つてもそれは自然の一部分であるから、考へ方に依れば天地山河は元々自分と

一體なのである。路傍に轉つて居る石塊や、一滴の水にしても、同じやうに悉く自然の法則によつて生じ、法則に依つて支配されながら存在して居るので、科學的に考へればさういふことはちつとも不思議ではないのです。

今や物理學は物理學の爲の物理學ではなく、化學は化學の爲の化學ではなく、生物學は生物學の爲の生物學であつてはならないのです。それは實に人生問題の根本概念ともなるのであつて、今日の科學者に與へられたる最大の使命はそれ等を總括して正しき自然觀を構成することであると私は信じて居ります。

問　大變よく分りましたが、今までの宗教に代るものとして一般の人に充分得心がゆきませうか、も少し賴りになるやうな點がほしいと思ひますが？

科學的に見た生と死

答　これからの人には充分納得出來ると思ひます。然し今迄お話したのは主に自然觀でありますが、自然觀のみではまだ充分でなく、其上に尙正しき生命觀と云ふものが必要なのです。生命の本體は今日まだ分つて居ないのですが、吾々は一定の性質を有する

もの、即ち刺戟感應性、運動性、物質代謝、生殖などの如き基本性質を有するものを生命あるもの即ち生物と呼んで居るのです。

生命の起源に關しては生氣説と器械説とがあります。器械説によれば生命の源は身體を構成する物質的要素に備はつて居るのであると云ひ、また生氣説によれば或る生氣と云ふやうな未知のものが外界から這入つて來て生命となるのであると主張します。その何れが果して眞であるかは議論の存する所でありますが、尠くとも次の事だけは確かです。即ち生命がある爲には物質が或る組合せを作つて集まつて居る事が必要で、言ひ換へますと、物質が或る一定の組合せに於て集まつた所にのみ生命なる機能が現はれて來る事は確かであります。そして凡そ生あるものは必ず死があるので即ち或る時間を經過すると物質の組合せが崩れ、生命は失はれて物質は自然に還るのです。それを吾々が死と名づけて居るのです。生命のある間も、死後も、すべては大自然の法則に從つて流れて行くので、尠くとも肉體といふものは物質不滅の法則併びにエネルギー不滅の法則によつて支配されて居る。此點は無生物と同じであります。

一面から見ますと、個體は死しても生命は次の時代に傳つて居るのです。即ち個體を

構成して居る大部分の細胞は、或る時間を經過しますと物質の組合せが崩れて生命なる機能を失ひ、物質は自然に還るのですが、一部の細胞のみは個體より離れて新たなる個體を形づくり、斯くして生命は子より孫へと傳つて行くのです。一人の人間が生れては自然に還り、又次の人間が生れては自然に還る、——斯やうにして段々に次から次へと生命が傳つて居る譯です。其狀態は丁度波に譬へる事が出來ませう。水は自然、個々の波は一人一人の人間と思へば宜しい、一つの波が生れては自然に還り、又その次の波が出來ては自然に還る。丁度波に譬へればよいのです。

個體の發生を考へて見ると、個體は卵細胞の發育したもので、胎生期には母體より其の榮養を受けて居りますが、生後は外界から食物を攝つて自分の體に同化しつつだんだんに成長し、小兒期より青春期を經て成人期となり、それより老衰期に入つて遂に死に終るのです。

個體の死、それは失くなるのではなくて、唯形が變つて行くのである。生命の本體、それは解らない、今の所解らないけれども、身體を構成せる要素は死によつて無くなるものではない。科學的に見れば其の場合にも尠くとも、物質不滅及エネルギー不滅の法

則が適用せられるわけで、從つて死といふ現象によつて、物質はその組合せが崩れて自然に還るとしても、死後とてもやはり生前と同樣に、大自然の法則に依つて支配されて居ることは確かであります。それ故に死によつて只其形態が變化する事を考へ得るのみであります。

要するに一人一人の人間は大自然の永遠の流れの中に現はれた一つの波であるとしか考へられない。死によつて個體としての姿が變る事は人生に於ける最も悲しい極みではありますが、靜かに考へて見ると、個體を構成せる要素は死後とても永遠なる大自然の法則、神祕なる絶對的の力によつて支配されつゝ何等かの相(スガタ)に於て存在するのであるから、吾々は須らく此無限なる大自然の永遠の流れの中に我れを托して安心立命すべきであります。そこの所をしつかりとよく考へたなら、自ら死生觀といふものが出來、斯くてこそ自我を大自然に合體せしめ、死生を超越したる安住の境地に達することが出來るのであります。

問 只今のお話で、死生觀それさへわかればよいといふことは、吾々に肯づけます。しかし、それを文字通り解釋すると斯ういふやうにならないですか、自然の法則から觀

ると人間も物質の或る組合せに過ぎない、さうすると、犬も、人間も、机も、何も彼も自然の法則によつて出來ただけのもので、人間として奮發して活動しなければならんと云ふ、人間の努力を無視するやうになりませんか？

正しき人間觀

答 そこなのです。だから次に正しき人間觀と云ふものが必要になつて來るのです。吾々がお互に此世の中に人間として生れて來た、其事が既にもう非常な感謝に値することなのです。地上に於ける凡ゆる存在物の中で人間程よく出來て居るものはない。謂はば人間は自然の作りなせる最高の藝術なのです。こんなによく出來て居るものは他にはない、自分といふものが大自然の永遠の流れの中に人間として生れて生きて居ることは其事が非常に感謝すべきことなのです。生命は尊い自然の贈り物であると云ふ事を知つたならば、吾々は生命をば何處までも大切にして、一生を最も有意義に過さなければならぬといふ考が起るのであります。また生に對する感謝の心があればこそ、親を大切にし、祖先を崇拜する念が湧いて來るのであります。

人間の身體は蛋白質、脂肪、含水炭素、水、鹽類などのやうな分子の組合せから出來て居り、それ等の成分の集まり方によつて夫々筋肉や骨などの細胞となり、組織を形成し、胃や、腸や、肺や、心臟や、腦神經などの器官を構成して居るのです。食物を攝取し、夫れを消化吸收して自己の體に同化し、一方空中の酸素を吸取して物質を酸化分解しつゝエネルギーを出して生活機能を營む有樣や――それには酵素やコロイドが重要な役目を演じて居る、――更に內分泌や自律神經系によつて器官相互の連絡調整を圖る狀態など、その微妙なる、微に入り細に亘つて觀察すればするほど悉く驚嘆に値しないものはありません。

また吾々は美しき色を視、樂しき音樂を聽きますが、色は光による網膜の刺戟が腦の一定の部分に傳達せらるゝ時に起る感覺であり、音は空中の音波による鼓膜の振動が傳達せらるゝ時に起る感覺であると知る時、誰かその精巧なる機構に驚かない者がありませうか。

更に人間の精神機能に至つては一層驚嘆すべきものがあります。進化說に依ると、人間も單細胞動物から進化して來たものであると謂はれて居りますが、今日現存する動物

と人間とを較べて見ると胃や腸や心臟や筋肉などは原則的に殆んど差異がない、只非常に違ふのは腦の中樞の働きである。即ち人間では腦の中樞の機能が非常に發達して居て、到底他の動物の比ではありません。其中でも運動をしたり、痛みを感ずるといふことは大して違ひないが、『考へる機能』は鳥獸と非常に違ふ、それが「心」となつて現はれるのです。

人間の心の働き、精神機能！そこには認識力あり、理解力あり、注意力あり、記憶力あり、想像力あり、思考力あり、判斷力あり、それから快、不快、喜び、悲み、乃至は憧れ、惱み、同情などの如き複雜なる感情や情緒、並びに意志の作用などがあります。斯くの如き卓越した驚くべき精神の機能によつて人類の文化が建設されたのでありまして、主として認識の力によつて科學が發達し、意志の働きによつて道德や法律や經濟が生れ、尙感情の方面に於ては宗教や藝術の發達を見たのであります。

更に一面から觀察するならば、人間は理想に基いて行爲をする。そこに人類の特長があるのです。それでは理想とは何ぞやといふに、それは大體に於て眞・知・善・愛・美――此の五つに分けて考へる事が出來ます。此五つの理想の完成に向つて努力することが人

間の特長であり、其尊い所以であるのであります。

『眞』とは眞理の探究で、即ちまだ判つて居ない自然界の眞理を見出さうと努めることで、それは人間しかやつて居ない。今日の自然科學者のやつて居る所はそれです。次に『知』とはすべての事柄に關して正しき知識を得んとする努力である。これも人間のみに見られる事なのです。吾々が行爲をするに當つては常に正しき知識が必要である。如何に善行をしやうと思つても、正しき知識がなければ却つて善行にならぬ恐れがある。

『善』とは善き行爲をしやうとする努力で、即ち社會の爲め、國家の爲め、惹いては全人類の爲に善行をしやうとする努力である。只消極的な所謂道德家と云ふのではなく、自ら進んで社會の爲に、國家の爲に善行をしやうと努める事である。それには正しい知識と云ふものが必要になつて來る。吾々はいくら善い行ひだと思つても正しき知識がなければ、動機は善くても結果は惡くなるかも知れない。動機が善くても結果が惡ければ知識が足りなかつたか、或は不注意だつたといふ點に責任を負はなければならない。動機も善く結果も善くてこそ始めて善行と云ひ得るのである。それ故善行を爲すにはどうしても正しい知識が必要である。知と善と兩々相俟つて社會の爲、國家の爲、はた全人類の

爲に努力しやうといふことは是は人間にしか見られないのであります。

『愛』は隣人に對するに愛を以てする事で、これも人類のみに見られる事です。隣人に對する愛は、やがては社會に對する愛、國家に對する愛、人類全般に對する愛になるのです。さういふことは動物には見られません。

『美』とは藝術、即ち詩歌乃至繪畫、彫刻、音樂など——さういふやうなものに依つて人間生活の內容を豐富にしやうとする努力であり、是も亦人間にしか見られないのです。

此の五つの理想の完成に向つて努力するのが人類の尊い特長であります。然しながら一面から觀察すると、人間も動物である。隨つて動物に共通な根本性質を二つ持つて居る。其一つは生命を保持して行く事、他の一つは種族の繁殖を計る事、これであります。生命を保持するといふことの爲には、毎日のパンを得なければならない。明日のパンは自分自身で得なければならぬ。それが財產に對する所有慾となるのであります。また種族の繁榮、——それは戀愛、結婚問題となつて現れて來る。

美化された人間の本能

所が此動物に共通な二つの本能的慾望も人間に於ては非常に美化され理想化されて居る。即ち明日のパンを得る爲の努力をば社會の爲、國家の爲の努力と一致させることが出來る。さういふことは人間にしか見られないことであります。動物は他を蹴とばしても先に行くが、人間は自分自身のパンを得る爲の努力をば社會の爲、國家の爲、はた全人類の幸福の爲の努力と一致させる、かくして非常に美化され理想化され得るのであります。

次に種族の繁殖に關しても人間にあつては著しく美化され理想化されて居る。即ち結婚生活に於ては子供が生れるといふそれだけではなくして、身を修め、家を齊へ、そして子女を愛育する中に、いつの間にか愛といふものの體驗が出來る譯です。それ故に結婚は愛の體驗なりと云ひ得るのである。

その愛は軈ては隣人に對する愛となり、社會に對する愛となり、國家に對する愛となり、廣く言へば全人類に對する愛となるのであります。そこで人間にあつては結婚生活

の體驗が愛といふことの實行を促すことになり、それが何時の間にか人類の理想の一たる愛といふことと一致して行く譯であります。

それからもう一つ異性を想ふ情はやがては藝術の發達を促して居るのです。是は歌なども さうで、即ち詩歌の始まりは異性を想ふ情に始まるといはれて居りますが、是は單に歌許りではなくして、繪畫でも彫刻でも音樂でも皆同樣であります。斯くして生物に共通な種族の繁榮を計る本能が基となつて現はれて來る異性を想ふ情も、人間にあつては何時の間にか美化され、理想化されて『美』といふ理想に一致して居ります。

人間も一面から見れば動物であるから動物に共通な生命の保持、種族の繁榮——此二つの基本性質を備へて居りますが、動物ではそれが本能的慾望としてのみ現はれて居るに反し、人間にあつてはそれに伴つて起る行爲が、非常に美化され理想化されて居り、殆んど前に述べた五つの理想に合致して居る。そこに始めて人間の尊い所があるので、これが個人としても理想化された行爲をする人程眞に心の滿足が得られる所以なのであります。

問 只今のお話で人間の優越性はよくわかりました。が然し自然界に於ける法則、即

ち無形の偉大なる力の存在と、人間が理想の完成に向つて努力する事との間にどういふ關係がありませうか、自然觀と人間觀との關係に就て、も少しはつきりした說明が欲しいのですが。

自然の動向と人類の使命

答 さうです。さういふ疑問は當然起るべき筈なのです。これ迄の一般の考へでは、例へば花より花へと飛んで行く蝶を捕へて顯微鏡下に調べて見れば、蝶の體が斯くの如くであると云ふ事は分つても、それでは生きて居る蝶はわからぬと同じやうに、自然科學は自然界を對象として夫れを分析して研究するのであるから、自然界が「斯くある」と云ふ事は夫れによつて解るであらうが、人間が「斯くあらねばならぬ」と云ふ結論は夫れからは出て來ない。人間が斯くあらねばならぬと云ふ事は人文科學の掌る所で、從つて自然科學と人文科學とは各々その研究の範圍が異つて居ると一般に考へられて居るのです。言ひ換へると、自然法則は自然科學の研究で明かになるとしても、倫理法則、即ち人間の歩むべき道は人文科學の力によつて始めて明かにせらるべきであるとせられ、從

つて今日まで自然法則と倫理法則とは全然別々の事のやうに考へられて居るのです。是を此人生觀に就て云ふならば自然觀と人間觀との關係がどうも明かでないと云ふ事になるのです。

しかしそれは靜の自然のみでなく、動の自然、即ち大自然の動向を考へれば直ちに明かになるのです。吾々は自然科學の力によつて自然界に於ける法則の存在、即ち自然界に於ける無形の偉大なる力の存在を確認する事が出來たのでありますが、その無形の偉大なる力は大自然の動向となつて現はれるのです。換言すれば、自然界に於けるあらゆる存在——宇宙、生物、人類——それは何れも絶えず進化しつゝあるのでありまして、夫れが大自然の動向であるといふ事を知るならば、吾等人間の歩むべき道は自ら明かとなるのであります。

先づ天文學者の說によりますと、恒星は五乃至十萬億年前に現れたもので、地球の年齡は約二十億年であり、地球上に於ける生物は約三億年、地球上に人間が現れてからは約三十萬年を經たといふことでありますが、此等の數字の正否は別問題として、兎に角此宇宙は永遠の昔から今日の儘の狀態に於て存在したものではなく、段々に進化しつゝ

今日に及び、今も尙絶えず進化しつゝあるといふのが今日の天文學者の考で、所謂「宇宙進化說」といふのが夫れであります。

次に地球上に於ける生物の由來を考へて見ましても、初めから今日のやうな生物が存在したわけではなく、漸次に進化しつゝ今日の狀態に達したといふのが生物學者の說であります。初めは單細胞動物から段々に進化しつゝ系統的に發達して來たもので、脊椎動物になると魚類より兩棲類、爬蟲類、それから鳥類と哺乳類とに進化し、哺乳動物の內で最も進化したものが吾々人類であると考へられて居ります。動物進化の方法に就ては、自然陶汰であるとか、突然變異であるとか種々の學說がありますが、何れにしても動物が進化すると云ふこと、即ち「動物進化說」そのものは地質學や古生物學や比較解剖學などの發達に伴つて今日では一般に確かであると信じられて居ります。動物の進化とは頭腦の發達を意味する事は勿論であります。

更に最も顯著なる進化の跡は人類の文化史に於て見る事が出來ます。即ち人類の歷史を顧みますと、原始人は互に掠奪と征服とを事とし、其生活は動物に近かつたのでありますが、時代を經るに從ひ、それから遠ざかつて段々に文化の建設に努力し、漸次に文

化人として生活するやうになつた。即ち大局より見れば人類も亦絶えず進化しつゝある事は確かでありまして、それが「大自然の動向」であります。動物進化の過程に於ては强食弱肉、適者生存と云ふやうな事が見られたでありませうが、人類の進化は文化の建設を意味し、文化の建設とは結局理想の完成に向つて努力する事に外ならないのであります。從つて之を民族的に觀察するならば、大自然の動向に一致して眞、知、善、愛、美——これ等理想の完成に向つて努力し、進化より向上へ、向上より進化へと進み、眞の意味に於ける文化の建設に努力する民族は榮え、さうでない民族は次第に衰へて自滅に向ふのであります。それは有史以來の民族興亡史に見ても、或は現存せる各民族の實際の狀況に就て見ても明かなる事實であります。その關係は各個人に就ても全く同樣です。

大自然の動向は自然界に潛在せる無形の偉大なる力の現はれであり、神祕なる絶對的存在の動きであります。それ故に、吾々人間も亦自然の一部分である以上、すべての人は大自然の動向に一致して、どこまでも理想の完成に向つて努力しつゝ人生の道を步むより外に道はありません。それが人類に與へられた使命であります。從つて此理想の完成に向つて絶えず努力をする人こそは眞に力强い人生を送ることが出來るのであります

が、之に反して單に生命の保持、種族の繁殖といふ事が基となつた行爲のみをして居る者は決して力強い生涯を送る事の出來ないのが實際の事實であります。

生死を超えて

最も力強く最も幸福な感謝の生涯を送るには、前述の如き自然觀と生命觀と、そして人間觀との上に、理想の完成に向つて努力しつつ刻々を過すより外に道はありません。ただ物質に惠まれて居るだけでは眞に力强き、幸福な、感謝の生涯を送る事の出來ないのは當り前であります。何故なら物質に對する所有慾は、生命の保持と云ふ動物に共通な根本性質が基となつて起つて來る本能的慾望の現はれに過ぎないからであります。それですから物質許りを目標にして進んでも、それでは本當の心の滿足は得られないはずです。

結婚してよい家庭を創る。それから事業に成功して金を得る。それだけではまだ眞の心の滿足が得られず、もつと心の中に足りない何物かを要求するのが實際の狀況でありますが、其理由は前に述べた所によつて自ら明かであると思ひます。

それ故に、すべての人は先程言つた自然觀と生命觀とを充分よく理解して、自分も自然の一部分である事、そして無形の偉大なる力に依つて出來、それによつて支配されつつ存在して居る事を先づ心の中にしつかりと摑み、己が心を無形の偉大なる力に通はせて大自然の動向に一致し、言ひ換へれば自然に對する奉仕の念を以て、眞、知、善、愛、美、此五つの理想の完成に向つて努力をする。斯くの如くして一生を送つたならばその人の心は絶えず前途の光明に滿されつつ、最も力强い、最も幸福な、感謝の生涯を送る事が出來るのであります。人間はどうしても心をそこに置かなければならない。斯くの如き信念こそは必ずや今後の人々の心を支配して行くことが出來ると思ふ。

今の世の中では運命と云ふか、偶然性と云はふか、いつ豫期しない突發的の出來事に遭遇しないとも限らない、從つてたとへ今日物質に惠まれて非常に順調な生活を送つて居つた所で、何時悲哀のどん底に落ちないとも限らない。さういふ時にも己が心を自然界に潜在する無形の偉大な力に通はせて居れば自分の心の中に頼る所があるから、何もう一度努力しやうといふので再び勇氣を取戻して押切つて行くことが出來るのです。それですから斯ういふ人生觀に生きて居れば決して碎けることがない。又此世の中に於て

は近親の死、友人の死、親の死、兄弟の死、さては我子の死に遇はない者が果して幾人ありませうか。斯かる際にも前に述べたやうな生命觀、人生觀を持つて居れば情に於て悲しくとも、再び力強く努力して行くことが出來るのです。また自分自身が死に直面しても大往生をする事が出來るのであります。

問 では此人生觀を日常生活にどういふ風に應用して行けば宜しいのですか。またよく心の修養と云ふ事を申しますが、それは此人生觀に就て云ふと、どういふ事になりませうか？

心の修養と社會的知識

答 前に述べた自然觀と、生命觀と、そして人間觀とを充分よく理解してすつかり自分のものにして終へば、そこには自ら人生に對する信念と云ふものが出來て來る。人生に對する信念、即ち人生觀は實際の日常生活に於て現はれなければならぬ。

先づすべての者は自分が人として此世に生を享けたる事を感謝しつゝ、人生の意義は努力にありと心得て、嚴肅にそして朗らかにその日その日を過さねばなりません。たとへ

自分がどんな不幸な境遇に陷つても決して心をとり亂さないで、どこまでも更生の爲に努力をつゞける事が必要です。またすべての者は隣人に對するに「愛」を以てしなければなりません。實に共同生活の基調をなすものは人間相互の愛であり、人生はたゞ愛によつてのみ支持され、そして動いて行くのです。若し隣人が病める場合には一時も早く癒るやうにと心の中に祈りつゝ、その純眞なる麗はしき同情の念は直ちに手厚き看護となり、正しき醫療となつて現はれて來なければなりません。また不幸にして自分が病床に惱むやうな場合にはそれこそ却つて內省しつゝ心の修養をする爲めの好機會であると考へて、あせる事なく徐ろに恢復の時期を待たねばなりません。病氣とか、不幸な境遇とか、さういふ場合にこそ却つて眞(マコト)の人生を把握する事が出來るのです。

更に職業の點から云ふならば、如何なる職業に從事する者も理想の完成に努力しつゝ生活して行かねばなりません。先づ學者は眞理の探求に努力し、藝術家は美の完成に努力するとせば、何れの場合にも生活そのものが既に理想の完成への努力に一致して居るわけでありますが、他の如何なる職業に從事する者も皆、同じやうにさうなければならぬのです。

例へば、學生ならば――尊い自然の贈物である生命を大切にしつゝ――將來社會に出で、善、愛、乃至は眞或は美と云ふやうな理想の完成に努力し得る爲に、知なる理想の完成卽ち正しき知識の獲得に向つて努力して居るわけであります。また卑近な例として物品の製造販賣をして居る者に就て云ふならば、世の中の人々が其物品を要求して居るから、出來るだけ最新の正しき知識を應用して最も良き品物を出來るだけ安價に製造して夫れを欲して居る人々に頒たう、そして夫れに伴ふ一部分の正當な收益を得て自分の生活の資に充てると云ふ考へであれば、それは知―善―愛と云ふ理想の完成に向つて努力しつつ生活して居るわけで、パンを得る爲の努力は理想の完成への努力と一致して居るわけであります。從つて力強き人生を送る事が出來るのでありますが、之と反對に若しどんな惡い品物でも賣りつけて不當の利益を獲得しやうと云ふ考へであるならば、其人の心は物質に對する慾望に囚はれて居るのであるから、決して本當の心の滿足は得られない。

それは田園生活者に就ても同樣です。田園生活者は自然の風光に浸りつゝ、農作物や其他のものを產出してそれを世人に頒つのであるから、非常に善き樂しい生活であるべ

き筈なのです。たゞ然し此の場合にも世人が果して如何なる物を求めて居るか、何がその土地に適するか、また如何にせば良き作物を効果的に產出し得るか等々に關して、常に正しき知識の獲得に努めねばならぬ事は云ふ迄もありません。斯やうにして如何なる職業に從事する者も此人生觀によつて生き、力强き人生を送ることが出來るのであります。

斯くしてすべての者は元々どうしても理想の完成に向つて努力しつゝ生活しなければならぬやうな位置に置かれてあるので、夫れが大自然の動向であり、吾等人間に與へられた使命であるのです。

所が人間は誰でも、一面に於て動物に共通な本能的の慾望を持つて居る。そこで夫れをどこまでも美化し理想化して行かねばならない。それが實際に當つては非常に困難な事で、やゝともすると動物性の慾望の方につひ心を引かれて終ふ恐れがあるのです。今日の實際社會に於て物慾と性の慾望との爲に色々な見苦しい葛藤の絶えないのはあまりにも淺ましい事實ではありませんか。それですからすべて慾望と名のつくものを克服して、それを理想化し、理想に一致させて行く爲には絶えず心の修養を怠つてはならない

のです。

佛教では人生の一切は苦なり、苦は慾望より生ず、それ故に苦より解脱せんとせば慾望に對する執着を捨てなければならぬと訓へ、またキリスト教に於ては、慾望のない者はない爲に、すべての人間は罪ありとし、悔ひ改めよ、然らば救はれん、と訓へて慾望から去らしめやうと努めた。斯くして何れも慾望を離れ動物性から脱却せしめやうとした事はその内容が大自然の動向に一致して居るわけで、從つて共に大宗教として長い年月に亘り人々の心を支配する事の出來た所以であり、其點は確かに二大宗教の人類文化への非常に大きな貢献であると思はれます。

然しながら吾々人間も尊い生命を保持しなければならず、また種族の繁殖をも計らねばならぬのであるから、すべての慾望を完全に捨てゝ終ふわけには行かぬ。只それを、理想に一致させて行けばよいのです。其爲には各人の心の修養が非常に必要になるのです。それ故に吾々は常に自ら深く反省しつゝ絶えず心の修養をしなければなりません。修養の根本は先程言つた自然觀と、生命觀と、そして人間觀とを充分によく體得する事でありますが、なほ忍耐、克己、謙讓、敬虔、節制は何れも人々の心の糧となるのであ

ります。

また一面に於て吾々は初めから社會人として生れて來るのでありますが、社會の狀態は文化の發展に伴つて益々複雜になる傾向があり、從つて社會と個人との關係も亦だんだんに複雜さを加へて來るばかりであります。夫れ故に理想の完成への努力をなしつつ社會人として此世の中に生活して行く爲には益々社會に關する正しき一般的知識、即ち社會的常識と云ふものが非常に必要になつて來るのです。茲に於てか、大自然の動向に一致し、言ひ換へれば自然に對する奉仕の念を以て　どこまでも理想の完成に努力しつつ力强き人生を送らうとするならば、個人としての心の修養のみではまだ充分でない。それと同時に社會人としての正しき知識が非常に必要になるわけで、その社會的常識に基づいて、人々は――それぞれ自己の能力に適した方面に於て――理想の完成に向つて努力しつゝ生活し得るやうな社會的位置に自分自身を置くやう絶えず心がけねばなりません。所謂處世術や生存競爭なる言葉は此の意味に解釋せられねばならないのです。

問　お話は非常によく解りました。しかし各人が理想の完成に向つて努力しつつ生活しやうと思つても、今日の社會の情勢ではそれが許されないではないでせうか？

より良き社會の建設へ

答　元來良き社會狀態に於ては、人々はそれ〴〵自己の能力に適した方面に於て理想の完成に努力しつつ生活して行く事が出來る筈なのです。所が現今の社會は決して完全なものではなく、各人が理想の完成に向つて努力しつゝ生活しやうと思つてもそれがかなり困難な現狀にあるのです。それ故に吾々は絕えずより良き社會の建設へと努力しなければならないのです。そしてそれには先づ正しい人生觀を持つ事が絕對に必要なのです。より良き次の社會、より良き次の時代は實に各人の正しき人生觀より生れるのであります。

今實業家が此人生觀を持つて居れば、自分の事業が若し非常に成功し、多くの物的剩餘を生じた場合には言はずして社會的に使ふとか――それは善であり愛である――または何か理想の完成に向つて使はれるに相違ない。必要以上の物的剩餘をぢつと家の中に貯めて置くといふやうなことはなくなる筈である。政治家が此人生觀に生きて居れば最も良き政治を行つてすべての人々を眞に幸福にしやうと云ふ考へになる。從つて人口問

題や、食糧問題や、經濟問題等々は自ら正しき知識に基づいて解決される事になります。軍人にしても今の時代には國防が必要ですから、それに向つて努力をする。さうなれば勞働に從事する者も同じやうな氣持で生きることが出來るのです。

それであるから世の中の人々すべてが此人生觀を持つやうになつたならば、實に各人が最も力强き幸福な感謝の生涯を送り得るのみでなく、其曉には此世の中は社會的に見ても、國家的に見ても、或は又精神的に見ても、物質的に見ても、あらゆる點より見て最も理想的な狀態になるのであります。

此世の中を最も理想的なものにするには此人生觀を一人でも多くの人に體得させるのが最も根本的であるのです。今後は學校教育に於ても益々科學を敎へ込むから、科學を基礎とした人生觀は益々人々の頭に這入り易くなるに相違ない。而かも此の人生觀には假定がない、嘘がない。すべて事實に基づいて居るのであつて、而かも斯うすれば力强い幸福な有意義な感謝の生涯を送り得ると云ふ吾等人間の進むべき道が示されて居るのであります。

世の人々が此人生觀によつて生きるやうになれば、獨り個人的にのみでなく何れの方

面から見ても最も理想的な社會が出現するわけで、言ひ換へると、此世の中は地上の樂園と化するのであります。一見非常に迂遠なやうに見えて而かも最も捷徑な社會改造の道は一に此人生觀の普及にあるのです。それ故に私はすべての人が此人生觀に生きる日の一日も早からん事を祈つて止まないのであります。

明日の社會は今日の青年によつて形づくられるのである。明日のより良き社會は今日の青年男女の正しき人生觀より生れ出づるのである。諸子よ！　共に志を同じうしてより良き次の時代の創造へ、より良き次の社會の建設へと進まうではないか。

科學の學徒としての私は及ばずながら終世此方面に努力する考へである。昔の偉大なる人格、釋迦にしても、キリストにしても、未だ科學の發達しない時代に宇宙間に於ける偉大なる力、神祕なる絶對的の力を直感し、それに頼つて生くべき事、即ち人々の心の據り所を敎へた譯ですが、私は科學の立場から出來得る限り努力する決心である。これは、今日の科學の學徒に與へられたる最大の使命であると信ずるからであります。

記者　實によいお話を伺ひました。大變有り難うございました。　――（終）――

人生は果して何を意味するか。各人はそれに對して確固たる信念をもたなければならぬ。

およそ自然界は物質から成り立つて居る。だがすべての物質は――生物も、無生物も――法則によつて支配されて居る。法則は偉大なる無形の力だ。それは神祕なる絶對的の存在なのだ。自然科學はこの法則を知り且つそれを應用する事に努めてゐるが、法則そのものは永遠に不變である。

物質がある組合せを作ると、そこに生命なる機能が現れて來る。ある時間を經過すると組合せが崩れる。生命は失はれて物質は自然に還る。それが死だ。生命のある間も、死後も、すべては大自然の法則に從つて流れて行く。

人間は理想に基づいて行爲をする。そこに人類の特長があるのだ。だが一面においては人間も動物だ。生きて行かなければならない。種族の繁殖をも計らねばならぬ。でなければ人間としての使命を果すことが出來ないのである。

生命は尊い自然の贈り物である。人生は自然に對する奉仕である。人生の意義は努力にあるのだ。世人よ、全人類の幸福の爲に努力せよ！

（昭和七年八月十六日報知新聞所載）

昭和九年三月十五日第一版五千部發行
昭和九年五月十三日增刷七千部發行
昭和十年二月十五日改訂第二版五千部發行
昭和十年二月廿五日增刷五千部發行
昭和十六年十月十五日改訂第三版五千部印刷
昭和十六年十二月十五日改訂第三版五千部發行

（定價金十錢）

東京市大森區大森五丁目
編輯兼發行者　科學的人生觀普及會
代表者　長久茂
東京市神田區錦町三丁目一一
印刷所　三鐘印刷株式會社

科學的人生觀に對する反響

○　京都　T　氏

今日とかく迷信的なる人生觀行はれ候折、御高說の如き科學に立脚して理想の健全なる實現を人生の原理とせらるる人生觀を御鼓吹相成候事、誠に時弊を救ふに足るものと頗る意を强く致候御識見に敬服申上候

○　東京　N　氏

先生の人生觀を拜讀し、一層詳しく敎へらるる所多々有之、感謝の至りに存じ候、ただ偶然に支配され、目前のことのみに動かされ、しかも絕對的なるものを信ずるだけの眞摯と謙虛との態度を知らぬ現代人に、本當の意味に於て、先生の御高說が理解されんことを祈つて已まぬ次第に候、常に科學を人生觀にまで結びつけ、自ら深い學識を有しつつ、科學の Popularisierung に力めしヘルムホルツのことなど、今更の樣に思ひ出され候。

○　ギリシヤ　S　氏

科學的人生觀有難く拜讀致し候小生國際平和問題を書く折の指導精神の背景として不明確ながら同樣の意識を持ち居り、其結論が今も今後も妥當性を持ち得ると存じたる次第に候處、今一層明確の認識に到達し得たる心地にて奉深謝候

○　門司　K　氏

御發表の「科學的人生觀」は、從來の宗敎界にも、亦哲學界にも問題の一大炬火をつけたるものといふ可く、再讀三讀感嘆したる事に候、而して更らに親しく御垂敎を受け度祈念のつのる事に候。

自然科學を研究する極致は、宗敎觀の確立と相成るべき事、誠に然るやと感ぜられ候

○　東京　T　氏

科學的人生觀に對する先生の御高說を拜し、多年醫業を職と成す私には、深く感銘致しました。

○　朝鮮　U　氏

此度は御高著を拜讀して誠に現代人に對する說敎方法の大改革を暗示せるものとして衷心敬服仕り候、殊に未だ宗敎心無く又は宗敎を蔑視せる多數インテリゲンチヤに對する宗敎的人生觀の注入は正に此方法に依らざるべからずと存じ候。

○　東京　S　氏

科學的人生觀、再三繰返し拜讀仕候小生の如く死線にさ迷ひ、生活を無意義と觀じ、萬事懷疑的となり、所謂太く短くと云ふ樣な、誤りたる人生觀に支配され易き者にとりては、眞に安住の境地を見出したる思ひ有之候、小生も、生きて居る事を感謝すべき事を知り申候、尊き生命を飽くまで守り、一生を有意義たらしむべく努力致し、及ばずながら、何事か成すあらむ事を期し度く存居候。

○　名古屋　F　氏

科學者の觀たる人生觀、近來の宗敎として拜讀仕候

○　愛知　Y　氏

今般先生にはその廣汎なる御學以て、從來の宗敎に代るべき「科學的人生觀」を提唱され、これを以て人生の大事業として、御唱導に御垂るるとか承りました。私がこの至つて先生の御所論を一見した私は私のこの灰色の前途に燎々りが射して來るのを認むる事が出のでした。

先生の御說は私にとつて全く驚ありました。併しその驚愕は「これは耳新しい人生觀だ」といふ驚はなく、「おゝこれこそ私の今まして來た人生觀だ、私の求めて來生觀を堂々と唱導する人を私は見する事が出來た」といふ驚愕ました。

○　大阪　T　氏

作年感銘を深ふしたる御講演び記憶を新にして厚く御禮申上仰の如く、現代の如き信仰心人々に對しては、科學に即する非ずんば適切ならず、この意味貴下の科學的人生觀、死生觀は時宜を得たるものに存候、尙今大阪等に於て、御講演を開かれ待望申居候。

○　東京　A　氏

今までうかがへなかつた精し

發表の「科學的人生觀」は、從來の界にも、亦哲學界にも問題の一大をつけたるものといふ可く、再讀感嘆したる事に候、而して更らに御垂教を受け度祈念のつのる事。

然科學を研究する極致は、宗教觀立と相成るべき事、誠に然るやとられ候

○　東京　T　氏

學的人生觀に對する先生の御高說し、多年醫業を職と成す私には、感銘致しました。

○　朝鮮　U　氏

度は御高著を拜讀して誠に現代人する說教方法の大改革を暗示せるとして衷心敬服仕り候、殊に未た心無く又は宗教を蔑視せる多數イリゲンチヤに對する宗教的人生觀人は正に此方法に依らざるべから存じ候。

○　東京　S　氏

學的人生觀、再三繰返し拜讀仕候の如く死線にさ迷ひ、生活を無意觀じ、萬事懷疑的となり、所謂太くと云ふ樣な、誤りたる人生觀に され易き者にとりては、眞に安住地を見出したる思ひ有之候、小生生きて居る事を感謝すべき事を知候、尊き生命を飽くまで守り、一有意義たらしむべく努力致し、及ながら、何事か成すあらむ事を期く存居候。

○　名古屋　F　氏

科學者の觀たる人生觀、近來の一大宗教として拜讀仕候

○　愛知　Y　氏

今般先生にはその廣汎なる御學理を以て、從來の宗教に代るべき「科學的人生觀」を提唱され、これを以て御畢生の大事業として、御唱導に御專念さるるとか承りました。私がこの二月に至つて先生の御所論を一見したとき、私は私のこの灰色の前途に燎々たる光りが射して來るのを認むる事が出來たのでした。

先生の御說は私にとつて全く驚愕でありました。併しその驚愕は「おゝこれは耳新しい人生觀だ」といふ驚愕ではなく、「おゝこれこそ私の今まで追究して來た人生觀だ、私の求めて來た人生觀を堂々と唱導する人を私は遂に發見する事が出來た」といふ驚愕でありました。

○　大阪　T　氏

作年感銘を深ふしたる御講演を、再び記憶を新にして厚く御禮申上候。

仰の如く、現代の如き信仰心の少き人々に對しては、科學に即する宗教に非ずんば適切ならず、この意味に於て貴下の科學的人生觀、死生觀は、誠に時宜を得たるものに存候、尙今年も西大阪等に於て、御講演を開かれん事を待望申居候。

○　東京　A　氏

今までうかがへなかつた精しい御說をゆつくりて讀ませて預けて、眞に愉快に存じました。

隨分と細い點にまで御說明下さつてありますのに驚きました。本當に科學者ならでは解き得ぬ人生觀でございますと存じました、そして學校の學生さん達が、眞面目に人生を直視し、其步むべき道を敎へられて行かれる先生を師と仰ぎ得る事は、本當に幸福だと存じます、人間は何の爲に生きて行くかを、如何なる方法にせよ理解出來る事は本當に幸な事でございます。

○　福岡　F　氏

先生の御高說を大いなる感激を以て拜讀致しました。

當然起るべくして、然かも久しく現はれなかつた旣成宗教啓蒙運動が、今や先生に依つて普く天下に宣言された事は、二十世紀宗教改革の前驅をなすべき、歷史的快擧であると存じます。

先生の御宣言が具體的表現を取つて世界の人心を一新される日の一日も速かならんことを祈ります。

○　大阪　K　氏

何回も繰返して讀ませて頂きました益々深く進めていらつしやるお考へを熟讀致しまして、新しい喜びを感じ、父を初め、家の者にも拜見させました處、父等は先年當地で御話下さいましてから元氣を出しまして、日々無駄のない生活を送らなければと、一日中愉快に働いて居りますので、これも皆先

（裏面につづく）

（裏面下段より）

生の御陰だと喜んで居ります。

○　神奈川　M　氏

科學的人生觀不思通讀甚だ愉快を覺え申候、明治以來の教育は所謂後進國として當時の先進國の學術吸收に急にして宗教を置き忘れたる結果、我々被教育者も年と共に不足を感じ心ある者は各々心の空虛を滿たす必要を感じ居る次第に候、貴說は御同年輩には力强く共鳴し、一方後進者には誤なき指導となり可申候。

○　東京　A　氏

二度三度直接に先生の御熱辯を耳に致した私ではございますが、この細々と述べられた御言葉を靜かに心してみつむる事によつて、更に新な希望となぐさめに滿されますことを心より、深く〳〵感謝致して居ります。そして全體を通じ、科學者としての立場から、宇宙眞理を追求され、最も眞劍な御態度で人生を生ききらうと努力して居らるる先生の、尊い御姿の、命のみちあふれてゐるこの一文が、讀者の一部にどのやうな道をたどり乍らも、與へられたこの一生を、出來る限り鋭敏な良心に忠實に過し度いと惱み、念じつつある人に、たしかに、大きな力を御與へ下さつた事が豫想されるのでございます。

○　東京　F　氏

再三熟讀仕候處、小生の如き信仰の必要を感じつゝも從來の宗教に賴りきれざりし者に取りて大いに蒙を啓かる處有之、暗夜に燈臺を得たるが如き喜びに浸り罷在候。

○　岡山　T　氏

私は以前先生より頂きました、努力の人生觀を想ひ、いつも〳〵心に掛けて、弛るむ心に鞭つて居りましたが、此度のを拜見させて頂き、眞を求め、知を廣め、進んで善を行ひ、宏い愛を持ち、美を讃へ、總べてに努力して心おきなく自然の大法則に從つて進み度いと思つて居ります。

○　東京　K　氏

先生の御高說は私にとりまして實に沙漠の水でした、否太陽の惠みにも等しい大慈悲であらねばなりません。些々たる物質的損失から一切の希望も捨てて死まで覺悟した私でしたけれど、今は先生によつて、その最も愚であり、惜しむべき事である眞理を敎へられました。

先生！私は中學四年修業の敎養淺き青年です、けれどあの御高說を射るやうに十數回繰り返へして讀む中に、人間としての眞の生き方をハツキリと知りました。

○　靜岡　I　氏

科學に基礎を求めて說かるゝ新らしい宗敎、科學的なる宇宙觀、生命觀、人生觀によつて大いに啓發されました。近代科學精神によつて敎へられた私共に信賴される人生觀は、寡聞にして他にあるを知りませんでした。

敎育家より普及會に宛たる批評

○　樺太　F

自然科學の立場より宇宙の神きて、科學と宗敎との一致、科敎觀、科學的人生觀を啓示せら額田博士の御高說に對し、深き共鳴を覺え申候。今日の學校敎ては、生徒に正しき人生觀と宗念を與ふることが最も肝要なりせられ、之が爲には額田博士の人生觀に據るを以て最も有効適と存じ申候。

○　朝鮮　F

拜受の科學的人生觀、科學者らこういふお話を承りし事を非しく存じ候。所說一々尤も。非發され申候。同僚友人間に閲覽說に接しよろこびを分ち居り候。

○　栃木　M

我々現代人の頭にビタリと來旨只管敬服罷在候。特に敎育者自己の信念を確立し青少年を敎上に於てこの上なき指針と拜誦

○　栃木　T

私は既成宗敎を信じ御恥しい信仰を持つて居りますが、どうりなさを、今一つは時々行詰りる事があります。從つて信仰そに時に動搖を覺えます。私は額の科學的人生觀を熟讀し、先生を直接承つて感激いたしました。

し者に取りて大いに蒙を啓かる
者之、暗夜に燈臺を得たるが如き
に浸り罷在候。

○　岡山　T　氏

以前先生より頂きました、努力
觀を想ひ、いつも〳〵心に掛け
るむ心に鞭つて居りましたが、
を拜見させて頂き、眞を求め、
め、進んで善を行ひ、宏い愛を
美を讃へ、總べてに努力して心
く自然の大法則に從つて進み度
思つて居ります。

○　東京　K　氏

生の御高説は私にとりまして實に
水でした、否太陽の惠みにも等
慈悲であらねばなりません。些
物質的損失から一切の希望も捨
まで覺悟した私でしたけれど、
生によつて、その最も愚であり、
べき事である眞理を教へられま
！私は中學四年修業の教養淺き
す、けれどあの御高説を射るや
數回繰り返へして讀む中に、人
ての眞の生き方をハツキリと知
た。

○　靜岡　I　氏

に基礎を求めて說かるゝ新らし
、科學的なる宇宙觀、生命觀、人
よつて大いに啓發されました。
學精神によつて敎へられた私共
される人生觀は、寡聞にして他
を知りませんでした。

教育家より普及會に宛たる批評

○　樺太　F　氏

自然科學の立場より宇宙の神祕を說
きて、科學と宗敎との一致、科學的宗
敎觀、科學的人生觀を啓示せられたる
額田博士の御高說に對し、深き興味と
共鳴を覺え申候。今日の學校敎育に於
ては、生徒に正しき人生觀と宗敎的信
念を與ふることが最も肝要なりと思料
せられ、之が爲には額田博士の科學的
人生觀に據るを以て最も有効適切なり
と存じ申候。

○　朝鮮　F　氏

拜受の科學的人生觀、科學者の口か
らこういふお話を承りし事を非常に嬉
しく存じ候。所說一々尤も。非常に啓
發され申候。同僚友人間に閲覽して高
說に接しよろこびを分ち居り候。

○　栃木　M　氏

我々現代人の頭にピタリと來る御論
旨只管敬服罷在候。特に敎育者として
自己の信念を確立し青少年を敎導する
上に於てこの上なき指針と拜誦仕候。

○　栃木　T　氏

私は既成宗敎を信じ御恥しい程度の
信仰を持つて居りますが、どうも物足
りなさを、今一つは時々行詰りを感ず
る事があります。從つて信仰そのもの
に時に動搖を覺えます。私は額田博士
の科學的人生觀を熟讀し、先生の御話
を直接承つて感激いたしました。先生
の人生觀は思想でなく、生活體驗、生
活記錄であつて、私共の生活に一大迫
力を持つて居られます。生死の問題の
如き徹底して居つて、この信念さへあ
れば堂々たる大往生が出來ると思ひま
す。私は先生の人生觀に生きやうと考
へて居ります。又生徒にも時にふれ折
にふれこの尊き生活記錄を傳へやうと
思つて居ります。

○　兵庫　K　氏

宗敎と云へば直ちに迷信の如く思は
るる傾向あるに、迷信ならざる宗敎の
ある事を說く上に於て、博士の御高見
は極めて適切と、敬服致し居候。

○　千葉　T　氏

正しき人間觀を現時の青年男女に與
ふるには、此上なき卓見として推奬す
るものに有之候。

○　三重　Y　氏

額田博士御提唱の科學的自然觀及び
人生觀は、科學的になつてる現代人の
頭腦に最も入り易い說き方で、その卓
見に滿腔の敬意を表します。

最近の人生觀講演

昭和八年七月廿九日　福島市福電ホール
同　三十日　宇都宮市新聞社講堂
同　十月八日　大阪市國民會館
同　十二月十六日　川崎市市民學術講座
昭和九年一月五日　名古屋市商工會議所
同　七月十二日　札幌市今井記念館
同　十月十六日　新潟市水友會館
昭和十年一月十二日　靜岡市葵文庫
同　三月廿五日　丸ノ内帝國鐵道協會
同　五月十五日　千葉醫科大學樹德會

終